

# 子どもの側に立つひとつの決断

津守 真

## 職員室を開く

十年前のことである。

七歳のSくんが、私の手をひいて、職員室にゆきたがった。当時、職員室には子どもは入れないことになっていたので、私はためらったが、切に望んでいることが伝わってくるので、戸をあけて一緒に中に入った。

Sくんは壁面の教材棚をじっと見ていて、新しいポスターカラーの六コ入りの箱をひとかかえおろして私の腕に持たせた。それから、マジック、クレヨン、ゴム輪などの新しい箱をいくつも重ね、自分が持ちきれない分は私に持たせて、保育室に持ってゆくと言い張った。私はいろいろのことを言ったりなだめたりしたがどうしてもきかない。幾箱もの新しい教材を、もしかしたら全部駄目にしてしまうのではないかと私は恐れたが、そんな

にまでそうしたいのならば、子どもの言うことの方に従おうと心に決めた。それでいながら、私は職員室を出がけにポスターカラーの箱を四つばかり職員机の上にそっと置いてきたのである。一度心に決めながらどこまでもケチな気持ちを抱いていることが。

保育室にもどると、Sくんは、移動式の金属製絵本ラックから絵本を全部おろし、持ってきた新しい教材の箱をそこにきちんと並べた。そして「みどり 待ってる」と言う。さっき、職員室を出るときに私がそっと残してきた絵の具の箱のことである。子どもは私の心を隅まで見ている。それをとりに職員室にもどり、こんどは白墨の箱その他をまたひとかかえ持ってきた。そしていくつもの絵本ラックに教材を全部並べた。保育室の中央に何台も教材棚が並ぶと保育室の景観が変わった。他の子どもたちも寄ってきた。だれかが教材の箱を取ろうとすると怒る。ひとつ下さいなと言って手を出すと渡してくれる。

ここまで見てきてはじめて、これはスーパーマーケットの再現ではないかと私は気付いた。現代の子どもは野原の花摘みの経験はないが、スーパーマーケットの棚に並ぶ物を買う物籠にいれることは小さいときからだれもが経験している。それを再現して遊ぼうという気持ちは自然なことである。職員室で私がためらいつつ恐れていたことは何も起こらなかった。そしてSくんは、自分の考えによって部屋をつくり変える作業をして満足した。この日は弁当もたべないでSくんは棚の箱を何度も並べ変えていた。この後Sくんは学校の中でも自分のイメージを現実に移してゆくことをはじめた。

これが私共の学校で、職員室を子どもに開いた最初のできごとである。

葛藤

この子どもが、部屋の鍵をあけて職員室にゆきたいと言い張ったとき、それから、新しい教材を保育室に運び出したいと言ったとき、私の心は落ち着かず、一年分の教材を全部水の中に漬けてしまったらどうしようかなどと心配した。それだけではない。職員室には職員の私物もある。私のものだったらそれで構わないとしても、他の人はどんなに不快に思うか私には分からない。職員の生活も守らなければならない。

こんなとき、家庭だったらどうだろう。台所には流しもあるし冷蔵庫もある。いたずらざかりの子どもがいる家庭では台所に水をこぼされたり、親は子どもと一緒に日常生活を奮闘している。幼稚園でも学校でも、親が日常困らされている悩みを共にしなければ、表面的なきれいごとの教育になってしまうだろう。職員の生活を守ると言っても、子どもの仕事をする人たちなのだから、子どもが必要としていることならばそれを優先させることに異論はないはずである。

子どもが職員室に入って新しい教材を持つてくるといふ、こんな小さなことに、いまから考えるとおかしいくらいの葛藤と気負いを私は感じていた。さまざまな葛藤がありながら、私は子どもの側に立つ方に賭けた。

この日、保育の後、私は職員達に私の心の葛藤を話したとき、何でそんなことを心配したのかと職員たちにいぶかれ、私共は一緒に笑った。私は、子どもの仕事をする人は、

子どもが必要としているならばたとえ内心の抵抗や苦痛があっても、子どもと一緒に自分の生活を変えてゆこうとする人たちであることを知った。こう言っても、私は、教育や福祉の仕事をする人は子どものために自分を犠牲にすべきだと考えるのではないことを付け加えておきたい。絶えず変化してゆく子どもとの関係の中で自分を変化させる必要について私は述べているのである。むしろ、子どもの仕事を専門とする人は他人に明け渡すことのない真の自我をもっていなければならないのだと思う。

子どもの側に立ってそれまでの生活の仕方を変える方を私は選択したのだが、そのときに私をそう思い切らせた心の基盤に、それまでに積み重ねられてきた私自身の前史がある。大袈裟なようであるが、そのことについて次に述べようと思う。

#### 前史——幼児教育と特殊教育をめぐって

私はそれまで三十年以上、幼児の仕事をしてきた。お茶の水女子大学附属幼稚園には、その間、いかないうちは殆どなかったと思う。私の研究室が幼稚園の建物の中にあった時期もある。この幼稚園で、私は、子どもが遊ぶ中で自分の考えを実現する姿を見せてもらった。遊ぶ生活の中で子どもは自信をもって生きる力をつけ、多様な能力を伸ばしてゆくことを学んだ。一九四〇年代の後半から、五〇年代、六〇年代、七〇年代である。この幼稚園は、更にそれ以前一九二〇年代から、進歩主義教育の保育の実践を築いていた。

他方、私は戦後間もない時期から、障害幼児のグループの世話をしつづけてきた。日本

に幼児が溢れていたころ、どこの幼稚園、保育園も満杯で、障害をもつ幼児を受け入れてくれるところは皆無と言ってもよかった。定員が一杯というだけでなく、障害児についての偏見があった。障害児は普通の子どもとは根本的に違うという偏見、障害児には障害を治すための治療教育や訓練が優先するとの偏見、障害児には普通の人とは違う人生のコースをつくらねばならないとする偏見などである。私もその時代を生きてきたので、これらの偏見から自由だったわけではない。この子どもたちと直接にかかわってきたので、このような偏見をもとにして作られた常識は、何かがおかしいと私は次第に明瞭に考えるようになった。

直接に障害をもつ幼児とかかわるときに、幼児期の喜びや悩みはどの子どもにも共通であることが分かる。毎日気持ちよく充実して生活するときに、子どもは幸せであり、よく成長することは、どの子にも共通である。障害をもつか否かを問わず、どの子どもも、まず、○○ちゃんと呼ぶ子どもであることに変わりはない。

後に統合教育が言われるようになったときにも、障害児を普通の子どもに追いついてゆけるようにすることがしばしば目標とされた。この子どもたちが、幼児期のそのときに必要とすることにこたえる保育の場はあまりにも少ない。どの子どももひとしく、堂々と生きてゆける場所が保育の場ではないか。幼児教育は障害をもつ幼児のためのものでもある。しかし障害をもつ子どもがあまりにも生きにくいのが私の周囲の現状であった。私は

幼児教育を専攻してきた者として、普通の子どもと障害をもつ子どもとのいずれかを選ばねばならないとしたら、障害をもつ子どもの側に立てるだろうかと思えば自問自答していた。

Sくんと職員室で向き合っていたとき、葛藤する私の心を思い切らせた基盤には、このような私自身の根本問題があった。保育の中でできごと、自分自身の根本問題に立ち向かうことは、相互に連動し対話して行っているのではないかと思う。どちらが先とも後とも言えない。職員室で葛藤の中で子どもの側に立つことを決心したとき、私自身の根本問題についても新たな決意をしていた。私を大学から実践の場へと決意させた契機のひとつである。

私は大学から養護学校に移って、この三月で満八年になる。この間何人もの方々から、障害児の教育と福祉に転向されたのですねと言われた。しかし、すでに述べたように、私にとっては障害児と普通児の区別はない。幼児教育も特殊教育も子どものかかわり方において変わるところはない、実践の場におられる方には、このことは至極当然に受け取られることが多いので、これは有難いことである。

#### 幼児期から小学校期へ

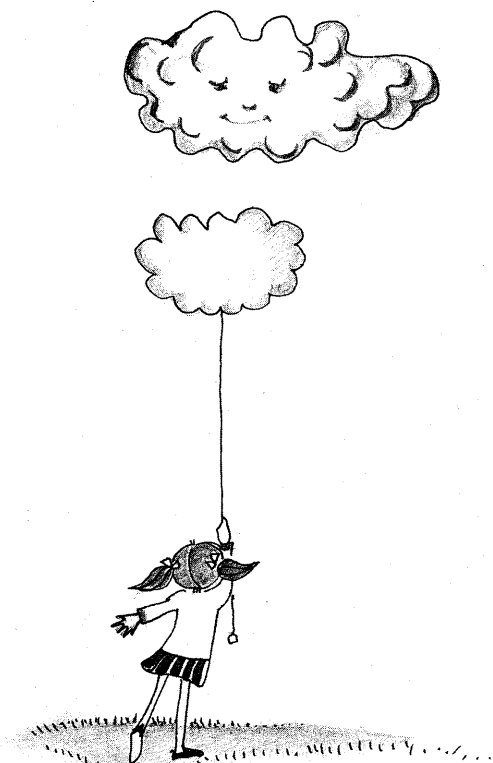
この日の午後、こんど結婚する職員のところへ、デパートから包みが届いた。Sくんは

その包みを開きたかった。結婚祝をあげさせるわけにはいかない。私は考えて、ポスターカラーの箱を包装紙で包み、紐をかけ、「取扱注意」など書くとSくんはそれをみてニヤと笑い、職員室にいつてきれいな包み紙を持ってきた。それで一時間位かけて丁寧に包みでは包み直し紐をかけ、まるで本物のお届け物のようになった。きれいな包装紙で貼り直すことによって別の箱を作るというテーマはこれから長い間つづいた。小学校の高学年に進むにつれて、そのやり方は更に精巧になっていった。大人が自分の考えを信じて実現させてくれるという信頼感があって、子どもはそれを思い切って創造的に展開させるのだと思う。私との関係で言うならばそれは職員室のあのときにさかのぼるのである。

Sくんはこのときすでに、就学猶予をしていて小学校一年生の年齢だった。私は幼児期についてはかなり自信をもっていたが、同じ考えが小学校の段階にも通用するかどうかについては自信がなかった。しかし、冒険だけでも、同じ考え方で小学校期をも通そうと考えた。子どもが自分らしく生きられるようにすること、自分で遊び活動するようにすること、それぞれの子どもが保育者とかかわりの中で毎日の生活を自分で作ってゆくように考えた。Sくんのこの後の成長をみると、それで良かったのだと思う。

こうして六年生を卒業させて中学校に送り出した子どもたちが外の世界に好奇心をもち、それぞれの仕方で社会生活に取り組んでいる。

Sくんはいま十七歳である。ミシンで美しい刺しゅうを縫い、版画で自画像を作り、高校で毎日マラソンをし、自分の部屋を自分のやり方で丁寧に分類し整理する。このような



Sくんの成長には、両親をはじめ多くの人たちがかかわっている。私との関係はその中の小さな部分にすぎない。しかしあの日の職員室のことはSくんの成長を支える歴史のひとつであったと思う。同時に私共の学校の歴史のひとつにもなっている。

(愛育養護学校)